

# 戦時中の一体験

戦没者を追悼し平和を  
祈念する宮崎県民の集い

宮崎県偕行会会長

眞方 侃 熊幼48

編集委員長…8月15日、宮崎県護國神社において、終戦記念日奉告会が開催され、引き続き「戦没者を追悼し、平和を祈念する宮崎県民の集い」が行われた。

この集いで、宮崎県偕行会会長の眞方氏が、「戦時中の一体験」と題して講演された。その要旨を紹介する。

なお、本原稿は、眞方氏の講演メモを文章化したものであり、ご本人の講演内容と一部異なっている。また説明不足の点は、ご了解頂きたい。

## ●冒頭挨拶

只今ご紹介に預かりました眞方侃と申します。

本日は、終戦記念日ということ、私が体験した戦時中における軍人教育について30分程度お話ししたいと思っております。

私が14歳の時から終戦までの1年半余りの間に体験した熊本陸軍幼年学校の話です。

これは、単なる懐古趣味でお話しするものではありません。

ましてや、単なる戦争賛美や戦前賛美でもありません。

戦後の風潮は、戦前は軍国主義であったと一括りにして、「戦争は悪」、「戦前は悪」ということが強調され過ぎていっていると思います。

そのため、戦前の実態から目を背けている側面があります。

現代において、真に平和を維持していくためには、戦前の悪かった面、良かった面などを総合的に幅広く検証する複眼的な思考が必要だと思えます。

よって、本日は、私が70数年前に体験した戦時中の軍人教育の実態について、その一端をご紹介したいと思えます。

軍国主義下における教育で、国民は騙されていたとか洗脳されていた、といったことがよく言われますが、私の体験を振り返ると、決してそういうことではなかったと考えています。

当時の軍人教育の実態を見ながら、国を守るにはどういうことか、平和を守るにはどういうことか、といった点について考える一つの材料としていただきたいと考えております。

それでは、早速本題に入って参りましたと存じます。

●戦時中の一体験―陸軍幼年学校の教育と戦後復興への思い―

## 1 宮崎県偕行会の目的

- 英霊に敬意を！ 日本に誇りを！
- 戦没者及び自衛隊殉職者等の慰霊顕彰並びに遺族の援護
- 安全保障に関する研究と提言
- 自衛隊への協力 など

## 2 陸軍幼年学校について

### (1) 揺籃期

① 幕末の頃、徳川幕府は横浜に横浜語学所を作り、フランスから将校と下士官を招いたが、明治2年(1869)に「兵学寮」の一部として接收し、明治3年(1870年)、4月に19歳以下の生徒を「幼年学舎」に入学させ、十分に学問を積み、士官養成の「青年学舎」への進学を計画した。

② 明治5年(1872年)に「陸軍兵学校寮概則」を制定し、それぞれの学校は「幼年学校」「士官学校」となった。翌明治6年(1873年)の徴兵制度発足前に、一応、幹部育成の原則が確立されたと思われる。

明治8年(1875年)に陸軍省直轄の「陸軍幼年学校」となり、陸軍志願の少年生徒及び陸軍軍人死没者の孤児を教育するために設立した学校で、外国語及び普通学を教える所とする

なっている。

③ この後、対象を戦死せる陸軍将校並びに相当官の孤児を「官費生徒」とし、その他の志願者を「自費生徒」とした。これによって、幼年生徒のほとんどが、中産階級以上の師弟に限定されることになった。

④ 明治16年(1883年)には、フランス語に加えて、ドイツ語が外国語として加えられた。明治20年(1887年)、陸軍の鎮台制度から師団制度に切り替わり、将校生徒の養成制度が幼年学校は、15歳以上18歳未満の「高等小学校卒業」程度の志願者を選び、3年間で学科と術科を修得し、士官学校への入校とした(この期間を旧幼年学校出身者と称す)。

(2) 当時の外国の幼年学校(18〜19世紀)  
・フランス:「エコール・ド・カデ」  
・貴族の次男、三男等は軍人が僧侶になるしかなく、それらを対象として軍人養成学校を作った。  
・ドイツ:「カデッテン アンシユタルト」  
・オーストリア:「カデッテン シュール」  
・帝政ロシア:「カデエツキー コルプス」  
↓「スハプートヌイ・シユリヤヘクツキー・カデエツキー・コルプス」

※イギリス アメリカには当時は無し。  
(3) 地方幼年学校の設立

① 明治29年(1896年)に勅令

第212号「陸軍中央幼年学校条例」

と、第213号「陸軍地方幼年学校条

例」が出来、前者(中幼)は、東京で

陸軍中央幼年学校、後者(地幼)は、

東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊

本の6箇所に陸軍地方幼年学校が設立

された。

② 明治30年5月に開校し、9月に

第一期生各50名、合計300名が入校

した。陸軍中央幼年学校は、大正9年

(1920年)陸軍士官学校予科とな

り、更に昭和12年(1937年)陸軍

予科士官学校となる。

③ 「地幼」の設立には、明治天皇

の強い思召しがあったとの言い伝え

がある。乃ち、明治41年伝達の「聖旨」

は次の通りである。

「陸軍幼年学校生徒ハ将来国軍ノ楨

幹トナルヘキモノナリ 故ニ其ノ志操

堅確 品格高潔 學術優秀ナルヲ要ス

之ヲ以テ幼年学校生徒ノ性格並教育ニ

就キテハ 陛下ノ常ニ御心ヲ留メサセ

ラルトコロナリ」

(4) 「地幼」から「陸幼」へ

第一次世界大戦が終了し、大正9年

(1920年)勅令第237号で陸軍

幼年学校令を制定し、高等小学校又は

中学校(1年/2年)より幼年学校に

入校、3年後に卒業し、士官学校予科

(2年)、士官候補生隊付勤務(6カ月)、

そして、士官学校本科(1年10カ月)

へというコースが設定された。士官学

校予科には、中学校(4年/5年)よ

りと、現役下士官よりの選抜者が同時

に入校出来た。

(5) 軍縮時代の幼年学校

東京陸軍幼年学校…存続

大阪陸軍幼年学校…大正11年廃校

昭和14年復校

名古屋陸軍幼年学校…大正12年廢

校/昭和14年復校

仙台陸軍幼年学校…大正13年廢校

昭和12年復校

※熊本陸軍幼年学校…昭和2年廢校

昭和14年復校

広島陸軍幼年学校…昭和2年廢校

昭和11年復校

(6) 幼年学校の語学教育

東京陸軍幼年学校…フランス語・ロ

シア語

大阪陸軍幼年学校…フランス語・ロ

シア語

名古屋陸軍幼年学校…ドイツ語・フ

ランス語

仙台陸軍幼年学校…ロシア語・英語

熊本陸軍幼年学校…ドイツ語・英語

広島陸軍幼年学校…ロシア語・ドイ

ツ語・フランス語

(7) 教授部教育 旧制中学校4年以上

の学力を養成(午前中に原則として実

施)

修身、国語、漢文、作文、習字、外

国語、歴史、地理、数学、博物、物理

化学、図画、唱歌。

(8) 訓育部教育 現役の陸軍少佐又は

大尉と2名の下士官担当(午後実施)

教練、体操、剣道、柔道、精神訓話

訓育提要

軍人の専門教育だけではなく、明治

の日本が持っていた徳育の基礎教養教

育に重点があった。天皇陛下を尊敬し、

父母に孝養を尽くし、いかなる艱難に

も打ち克つ心身をつくることを大事に

した。

また、将校生徒としてのプライドを

持ち、凛々しく、淡泊で、質実剛健、

忠節を尊び、礼儀正しく、信義を重ん

じ、質素を心掛け、任務に積極的な実

行を旨とし、情誼に厚い伝統精神を受

け継ぐことに加え、恥を知ることを教

えた。

(9) その他

① 全寮制の生活であり、喇叭によ

る行動であった。(6時起床/21時30

分)

② 自習室と寝室は隣合わせに作ら

れており、自習室は30名/35名分の机

が各人に1個ずつ配置され、寝室は、

10台/12台の寝台を向かい合わせに設

置し、寝台の足の横の棚が整理棚で

あった。

③ 成績の評価は、20点満点方式

「4点きざみ」で甲乙丙丁戊で、甲

丙は合格、丁は補習対象、戊は落第点

であった。

④ 健康管理は大変厳しく、特に胸

部疾患、皮膚病、トラホームは要注意

であった。

⑤ 全学年を通じての誕生日会が毎

月1回食堂で行われていた。

⑥ 外出は原則として徒歩であり、

複数での行動が求められ、帰校時間の

15分前迄には遅くとも校門に入るこ

を求められた。(次の行動準備の為)

⑦ 納金制度(月謝)は、昭和20年

4月に廃止(勅令585号)となり、

「特待生」「半特待生」「自費生」は、

全員5円50銭/月を軍事部郵便局扱い

での入金(給料)となり、8月迄続い

た。

3 戦後、勤務した旭化成時代を振り

返つてみて

『熊幼会報』(平成20年8月 最終号)

の寄稿文より抜粋。

1 訓 眞方 侃

昭和19年4月1日(土)午前5時30

分 唼々たる起床ラッパで清水台上の

感激の一日が始まった。熊幼48期第1

訓育班の生徒監は浅野宗次陸軍少佐

(東幼33期・陸士48期)で58名の幼年

茶目の教育を担当されることになっ

た。学科・術科・演習等で、当時の中学同級生に較べ本当に恵まれた全人格的な全寮制教育（自覚と責任・礼儀と規則・積極性・切磋琢磨・朋友相信等）を受けることが出来たのは、私にとつてその後の生活の基礎となったのである。即ち次の5項目に纏め行動の指針としていた。「明朗快活」「相互扶助」「規則遵守」「誠心誠意」「率先垂範」である。

た。これこそ情誼に厚い熊幼精神の発露であろう。

また、昭和57年M&Aで旭ダウが解散になった時、発泡体事業をダウ化工に譲渡されることになり、関係従業員に対する説明を再三再四、澤 克也氏 陸士61期と共に率先垂範をもつて実施し、多くの従業員と3工場をスムーズに引き渡すことに成功したのも熊幼時代の教育の成果であると確信している。

昭和55年6月川崎ポリエチレン工場で爆発火災事故が発生したが、工場長として全従業員に対し「今回の事故の全責任は工場長にあるので心配せずに関係部署と密接な連携をとり行動せよ」と直ちに指示を出した。結果として会社・近隣工場・川崎市・神奈川県に遅滞なく事故発生を通知したので後刻石油化学業界の事故対応の範となるとの評価を受けた。勿論事故始末書を提出して会社の処分を待っていたが、何と対応が模範的であったとのことでその後の処遇及び昇給については問題がなかった。事故発生後は1週間以上工場に泊まり事故処理に当たっていたが、沢山の熊幼の先輩及び同僚より見舞いの電話があった。特に忘れられないのは、偶々同じ工業団地にあったセントラル化学に勤務していた田中義浩君（3訓）は度々来場し激励してくれ

役員退任後3人の子供もそれぞれ結婚し、独立したので郷里の宮崎に帰ったが、仲々フリーな時間が持てないのが現代である。次世代を担う子供や地区の安全・安心な環境作りのために今後共熊幼精神を忘れずに率先垂範少しでもお役に立ちたいと考えている。

#### 4 おわりに 平和教育について思うこと

① 戦争の記憶を風化させない  
② 戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを伝える

③ 戦没者の慰霊、国のために命を捧げられた方々への感謝・顕彰

④ 戦争をいかに防止するか↓国の防衛への認識

⑤ 健全な愛国心、自国への誇りの涵養